

# 前沢小梅(まえざわこうめ)

登録番号：第1337号

育成者：前澤千寿

登録年月日：昭和62年6月10日

来歴：小梅系の実生より選抜

登録者：有限会社小町園（長野県上  
伊那郡中川村片桐6626-2）

## 特性

### ■栽培特性

樹姿は若木ではやや直立性を示すが、結実し始めると開張する。このため、主枝の角度は45度から60度と広く開いた枝を用いることが必要で、角度の狭い枝は裂けやすい。

樹勢は強く、枝梢が太く、しかも節間が短くかたく伸長するため樹は大きくなる。このような特性から、栽植に当って最終的な栽植距離は肥よく土壌で11m×11m、やせ地では9m×9mと竜峡小梅よりやや広くする。

葉は楕円形で、葉身先端の形は尾状であり、葉の大きさは小である。

花は白色一重で、花卉の数は通常5枚であるが、まれに6～7枚のものもみられる。花量は多く、自家結実性が強い。生理落果も少なく極めて豊産性である。

開花期は育成地（長野県上伊那郡中川村、標高560m）で4月10日頃である。

### ■果実特性

果実は円形で、果頂部は尖り、こうあは浅く広い。扁肉果は少ない。果皮の色は淡緑色で、果皮にやや赤色を呈するが着色部は微である。果実の大きさは青梅の収穫期には5～6g、成熟期には竜峡小梅の2倍ほどの8g程度の大粒となる。果実は早期肥大性に富み、生育始めは「竜峡小梅」に類似するが、生育が進むにつれやや腰高の果実となる。

熟期は育成地で6月上旬であり、極早生の「竜峡小梅」より4～5日、「大栗小梅」より7～8日ほど早い極早生種であり、「竜峡小梅」の収穫始めには収穫が完了する。果肉は厚く、肉質は緻密である。核は半粘で、形は楕円形であり、大きさは平均0.7gでやや大きい。

### ■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

黒星病、かいよう病、変葉病などの病害は一般防除で十分に防除可能である。胴枯病、枝枯病など枝幹性病害には強く、耐寒性もあることから高標高地帯までも栽培可能な特性を有する。

「前沢小梅」も他の梅品種と同様に浅根性であり、干ばつや滞水には弱い。灌水施設の設置や排水対策を十分に施し栽植する。

「前沢小梅」や「竜峡小梅」などの小梅は、目標収量を800～1,000kgとする。目標収量に対する施肥量は10a当たり窒素16～20kg、リン酸4～6kg、カリ10～13kgを標準とする。窒素施肥量を多くすると枝梢がおう盛に伸長して強枝になりやすい。整枝せんに定に支障をきたすばかりでなく、樹体の充実不良による耐寒性の低下で枝幹性病害の発生の助長、収穫期の遅れなど、「前沢小梅」の極早生や耐寒性の特性を発揮し得なくなるので多肥には注意する。

### ■地域適応性

耐寒性に強い特性を有するため、長野県では標高700m以上1,000m地域で栽培が行われている。また、極早生大粒小梅の特性を生かし、温暖地域での補助品種としても導入されている。園地は排水が良く土層の深い壤土ないし砂壤土が適する。

(牧田 弘)